

本人主体の支援とは

自閉性障害のある人への支援を通して考える

成人期の厳しい状況

先ほど、今日の集まりの趣旨説明にもありましたように、今、障害のある成人の人たちのおかれている状況は大変厳しいものがあります。今日ここにお見えの皆様の中で、成人の人たちを支援されている方は、どれくらいおられますか？...ほとんど、半分以上ですね。それから、学童期の児童を支援されている方は、おられますか？10人足らずでしょうか。それから、幼児期はいかがでしょうか？...あまりおられないですかね、あ、でも少しおられますね。

子どもたちは生まれて以降、乳児期、幼児期を経て、学校に行き...と成長していき、いずれ成人になります。そのときの姿は様々です。障害があっても元気に暮らしている人もいれば、後でお話するような非常に厳しい状況におかれている方もおられます。もちろんご本人の元気な姿に出会うと、私たちは、「日々の関わりをこつこつと積み重ねてきて、良かったんだなあ」と安心します。しかし、中には、何年かの空白期間を経て久しぶりに出会ったとき、その表情や行動から「小さい頃には人を信頼してあんなにすくすく育っていたのに、なんでこんなふうになってしまったのだろうか、何があったのだろうか？」と辛い気持ちにさせられる場合も多々あります。

行動障害は作られる

ある人が厳しい状況に陥るのにはそれなりの理由があります。今日のタイトルにありますように、「行動障害は作られる」のです。もちろん、意図してそう仕向ける人はいないのですが、本人がいろんな人たちと出会う中で、いろんなことが起こって、結果として非常に厳しい状況に追い込まれてしまうということなのです。

小さいころから成人期になるまで、継続して家族の方と一緒にやってくると、ひとりの人が幼児期、学童期にどんな困難に直面して、どういうことで難しくなるのかが分かってきます。家庭でもいろんな難しい問題が起こりますが、家庭を取り巻く地域においても、いろんな相談機関とか、学校や施設でもそうです。いろんなところで本人と環境との間で何らかの齟齬というか「ずれ」というか、そういうものが起こってくる。家族の方のお話を聞きつつ、その人が出会った人たちや関係機関との関わりのある方を丁寧に見ていくと、「ああ、こんなふうになっていくんだ」と、問題が作られていく構造が次第に見えてきます。こんなふうにして本人や保護者は辛い状況に追い込まれていくのだなと。障害のある子どもだけではなくて、保護者も、きょうだいも、悪循環のなかで苦しい状況に追い込まれていく、それ

は明らかです。しかし、残念ながら、成人期の一時期だけ、それも本人の様子だけを見ているのでは、そうした構造は見えてこないです。

今日、私の話はそここのところ、つまり小さい時期から長年にわたる周囲との関わりを経て行動障害が作られていく、その話をさせていただきます。意図的に悪くしようとする人はいないのにそうになってしまう、その背景を少しでも理解して、共有していただけたらと思います。一方、たとえ現状が厳しい状態であっても、本人の立場に立って、本人と取り巻く環境の関係を調整するという、援助の原点に戻って支援のあり方を見直すことで、必ず行動障害は改善される、そう私たちは確信しています。ただ、その背景にある問題の構造が見えていないと有効な支援になりません。そこを皆さんと一緒に考えたいと思います。

(続く、全 67 頁)

以下目次

講演「行動障害はつくられる～その背景と支援～」

成人期の厳しい状況

行動障害は作られる

行動障害の基本的理解

行動障害が作られる構造を明らかにするために

行動障害の支援

支援の本質に通じる問題

行動障害を示す人たちの厳しい実態

行動障害の具体像

地域生活に及ぼす影響

ともに暮らす家族の状況

支援者の状況

どう向き合うか

行動障害はこのようにして作られる

本人の主体性の回復を...意思の尊重

シンポジウム

自閉性障害のある人の主体的な生活の実現に向けて

～その危機的状況への支援と主体性の回復～